2012年釧中・湖陵は百周年を迎えます

くまざさ

第52号
発行
釧路湖陵同窓会
くまざさ編集委員会
発行日
平成20年3月1日
印刷所
藤田印刷㈱

湖陵高校変革の年

北海道釧路湖陵高校
校長 片岡辰三

着任挨拶

同窓生の皆様方には日頃から本校の教育活動に対しまして、多大なご尽力を賜り心よりお礼申し上げます。年度途中の平成19年11月16日付で、赤平高等学校から着任致しました校長の片岡でございます。宜しくお願い申し上げます。

本校は創立100周年を目前に迎える道東の雄、北海道屈指の理数科、そして、釧路市内はもとより、国内外において活躍する著名な先輩を多数輩出している伝統校であり、この湖陵高等学校に勤務できますことを大変光栄なことと思っております。

湖陵高校の更なる飛躍のために、また、理数科の充実発展のために、頑張りたいと決意を新たにしております。

私は学校経営の基盤として「人づくりはまちづくり」という考えを位置づけております。子供たちを地域全体で育てるという考え方が大切です。そのためには、家庭と学校の連携、さらには地域社会や地元企業との緊密な連携が重要であります。自分のふるさとに夢を語れるまちづくり、それを支える人づくりが必要でありますので、湖陵高校の使命（ミッション）は、この釧路（日本）にとって有為な人材（国のリーダー）の育成であります。さらには北海道内外にとどまらず国外においても活躍できる人材を育てることです。

鮭は4年目には生まれ故郷の母なる川に戻ってきて産卵をします。生徒も本来であれば、鮭と同じように4年間の大学生活を終えた後、ふるさと釧路に向かって戻ってくるはずですが、残念ながら、北海道においては依然として景気は厳しい状況にあり、すべての生徒が地元に戻って来て活躍する場はありません。しかしながら、地域に元気があることが大切です。地域の元気の源として湖陵生が活躍できる場を設けて頂けるよう、同窓会の全面的なご支援ご協力をよろしくお願い致します。

さて、本校は平成15年度から3ヵ年間にわたり、文部科学省の「学力向上フロンティアハイスクール」の研究指定校並びに平成16年度・17年度は、北海道エコハイスクールプロジェクト事業の「北海道サイエンスハイスクール」の実践校として、学力向上に向け学校一丸となって励んできております。このような文部科学省や道教委の研究指定を契機に学校の活性化を図っております。これらの研究指定に取り組むことにより大きな進学実績を上げてきており、昨年の春には、東大・京大に現役でそれぞれ2名、計4名の合格者を出すなど大きな前進を成し遂げております。

生徒にとって本当に魅力ある学校とは何か。保護者や同窓生が望む湖陵高校とは何かを考えつつ、学校をいかに活性化するかを基本として頑張りますので、ご理解ご協力を宜しくお願い申し上げます。

これらの指定校の取り組みを通して、本校においては教職員の意識改革はすでに進んでおりますが、「特に大きな問題はないので現状のままで良いという思い」を変革することはなかなか難しいものと考えております。自らを変革し、現状に満足せず、更に改善することによって、生徒にプラスになるのであれば、積極的に取り組む姿勢が必要です。

現在、新聞報道等において、本校の名前が出ている仮称「医進類型指定校」については、本校として十分にメリットがあるものと考えられるので、指定を受けるよう取り組んでいるところです。道東には医学系の大学がありません。また、管内の病院においては必要な医師の確保も厳しい状況にあります。地域医療に携わる医師の確保に向けて、高校段階から使命感を持った人材の育成に取り組むものです。大変意義のあるものと考えております。

さらに、文部科学省の事業であるSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けるべく、現在、学校として取り組んでいます。この事業は「将来の国際的な科学技術系人材の育成を図るため、科学技術・理科、数学教育に関する研究開発」を行う高校等を指定し、大学等との連携による先進的な理数系教育を実施するものです。本校においては、理数科が設置されていることから、学校を活性化するために、更には生徒の学力向上を図るために、十分に期待できる事業と考えており、指定されるよう総力を挙げて取り組んでいるところです。

結びに、同窓の皆様の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げますとともに、湖陵高校が変革し、更なる発展を遂げることができますよう、変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

目次

将棋全国大会に出場…… 2頁
親子三代釧中・湖陵百年紀…… 3頁
「誠愛勇から」湖陵11期生の巻 …4.5頁
同窓会総会・懇親会だより…… 6頁
総会幹事うら話…… 7頁
教職員湖陵会だより
ふるさとに歴史発見…… 8頁
事務局だより・編集後記

湖陵同窓会HP http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/

曙光遥かなり―将棋全国大会はどうなったか

1年　鈴木健吾

「志を高く持ち、易きに流れない」とは我らが釧路湖陵高校の指導理念であるが、それから考えるに、たとえ無鉄砲であったとしても、我々将棋部（を作る協力をしている者達）の方針は決して間違いではなかったと信じるものである。

「全道は通過点。ゆくゆくは全国優勝」と相当な古豪強豪のような目標を掲げ、我々、一将・鈴木健吾1年、二将・川村卓史1年、三将・山本晃3年は平成19年度の全道・全国大会に臨んだ。これから、その様子についてお伝えします。

さて、将棋の団体戦とはどんなものか、皆さんは知っているだろうか。高文連の場合、1チーム3名が一将・二将・三将となり、それぞれ相手チームの一将・二将・三将と対戦する。そして、2・3勝した方が勝ち、という単純なルールである。だが、個人の運と実力が全てを決める個人戦とは異なり、自分が勝ってもチームが負け、あるいはその逆もありの番狂わせの多い戦いである。また、チーム全員が全国級の猛者というのもなかなか難しく、チームの誰かがアキレス腱になる可能性も高い。

左から山本（3年）・鈴木（1年）・川村（1年）

さて、全道大会をチームとしては全勝でくぐり抜けた我々は7月下旬島根県出雲市での全国大会に出場した。昨夏の猛暑もまだ来たらず、やや過ごしやすい気候だったが、やはり全国はレベルが高い。

1回戦、優勝候補の岩手勢に1勝2敗で敗れるに及びチームの破竹の勢いに歯止めがかけられたようだった。2回戦の富山には2勝1敗、二・三将の活躍で踏みとどまったものの、3回戦で大分勢に1対2で敗れるに及び決勝トーナメント出場の芽は消えた。4回戦での対島根全勝も敗北を確認させるだけにとどまった。結果は46チーム中17位、優勝は東京勢だった。団結して戦ったという満足感も、異なる地を友と歩いた思い出もある。だが、釈然としないものが残る。それはおそらく、志が高すぎた訳ではなく、一将だった私が全道・全国で各3敗を喫しチーム敗因の元（他選手は全国で、各1敗のみ）であるからだろう。冒頭で述べた大風呂敷は引っ込めるつもりはなく、むしろそれに少しでも近づけるため、現在将棋愛好者達と共に精進中である。願わくは、なんとか将棋部（あるいは同好会）を作りたいが、それもおそらく来年後輩が入るかどうかだろう。優秀な後継者を期待したい。

また、来年は私自身もアキレス腱ではなく、自分の力で全国に連れて行けるだけぐらいの実力も磨かねば。広げた大風呂敷の中身については来年以降、また機会があればお伝えしますので、いささかでも興味関心を持っていただければ幸いです。

また、このたびの遠征について同窓会の皆様に費用等の面でお世話になりましたこと、最後に厚くお礼申し上げます。

親子三代 釧中・湖陵百年紀

3代に渡り通う高橋さん

開校100年まであと4年と迫りました。これまで釧中、湖陵を巣立っていった同窓生（全日、定時）は3万人になるそうです。その中から、親子3代にわたり、「学舎」に通った釧路市在住の高橋さんのご家族を紹介します。

高橋幸夫さんは、昭和19年に釧中を卒業（27期）しました。この年は、満17歳以上の男子が兵役に編入されたり、米軍による本土へ空襲が激しくなり、釧路市も市民運動会が休止になるなど、ますます戦時色が濃くなっていました。

幸夫さんは、成績1番で入学し、Cクラスの級長に選ばれたそうです。ちなみに、当時は50人クラスで3クラスありました。思い出の一つが「うさぎ狩り」です。年に一度、夜10時頃に学校を出発し、大楽毛まで歩き、うさぎたちを追いかけます。すると、待ち構えていたハンターが、仕留めるという具合です。片道15キロはあろうかという距離を歩くわけですから、ちょっとした遠足だったようです。

また、釧路市で最大のお祭り、厳島神社の例大祭は、相撲大会があり、開校したばかりの工業高校の生徒と対戦しました。バスケット部のセンターを任されていた幸夫さんは、その運動能力を十分に生かし、「負けはしなかった」と言います。

幸夫さんの息子さん、徹次さんは、現在、北大通で歯科診療所を開いています。昭和55年に湖陵高校を卒業した32期です。富士見町の校舎は老朽化が見え隠れし、寒い日には「ルンペンストーブに弁当を乗せて温めていました」と懐かしそうに振り返ります。また、修学旅行も現在とは違い、京都方面へ往復は鉄道の旅でした。もちろん青函連絡船も健在で、「船内のテレビでデビューしたばかりの桑田佳祐が、ベストテンで歌っていました」と話します。

また、幸夫さんと徹次さんは、親子2代にわたり、男澤哲夫先生に書道などを習っていました。「男澤先生は、ちょうど新任教師として入ってきた」と幸夫さん。男澤先生のネームバリューは、釧中、湖陵を問わず絶大です。

続いて、徹次さんの娘さん、幸夫さんのお孫さんにあたる舞さんは現在、湖陵高校に通う1年生です。ソフトテニス部に所属し、「学校は楽しい」と笑顔で話してくれます。冬休みにも補習の日程が組まれるなど、勉強にも忙しい毎日です。「でも、もう少し、柔らかい雰囲気があっても・・」と遠慮がちに話していました。

徹次さんに、現役の湖陵生に向けて「高校の3年間は、最も思い出が深いです。勉強に、部活に、そしてなにより大切な友人をつくることができます。充実した高校生活を送ってほしいですね」。さらに、「卒業してから、伝統のある高校だということを実感できるでしょう。全国で活躍中の卒業生のみなさんには、ぜひ、釧路をPRしてほしいですね」と期待していました。

幸夫さんの実家は、北大通で東京堂という電器、本、文具などを販売していたお店でした。9人兄弟の長男だった幸夫さんは、学校が終わるとすぐに帰宅し、店番をしていました。その間、本を読み、勉強をしていました。その後、北大へ進学し、耳鼻咽喉科を釧路市内で開業しました。同じく後輩に向ける言葉は、と聞きますと「勉強です」ときっぱり締めくくってくれました。　星　匠（湖陵30期）

「親子三代、釧中・湖陵百年紀」の寄稿募集

釧中湖陵開校百周年を記念し親子3代が元気な釧中・湖陵の卒業生（在校生を含む）のご家族（同居・別居を問わない）を教えてください。3人のお名前・卒業期（在校生は学年）を明記の上、原稿（原稿用紙2～3枚）・写真（3人がそろった写真）を当〝くまざさ編集委員会〟までお寄せ下さい。

誠愛勇から

湖陵11期生の巻

出会いから五十余年　あの青春の日々

湖陵十一期　砂山栄三
（元市議・釧路市弥生）

昭和31年4月、400名の新入生が湖陵11期生として出会ってから早いもので半世紀が過ぎ去りました。薄れかけた記憶・忘れかけた思い出を頼りに熱き青春の日々を書き綴ります。住吉匡校長は新入生を前にして、今日湖陵の生徒として全員がスタートラインに立った、君達の今後の努力で夢・希望を実現させることが出来る、目標を持って頑張るように激励された緊張と喜びの入学式を記憶している。

修学旅行と小説挽歌

3年間の高校生活で最大の学校行事の一つに修学旅行がありました。昭和32年10月初めて津軽海峡を渡り古の都京都・奈良・大阪そして大都会東京を巡る11泊12日の大旅行でした。400名の生徒は4クラスごと2班にわかれ、日本海周りで最初の目的地京都を目指しました。蒸気機関車の煤で顔を黒くしながら京都まで車中2泊座席の下には新聞紙を敷き、上には板を渡して4人が交互に眠ったり通路にごろ寝する生徒もいました。

京都・奈良では金閣寺・清水寺・東大寺などの神社仏閣を見学、夜は舞妓さんの美しい踊りとおいでやすの優しい京言葉に魅了されたのは私だけでしょうか？大阪城では壮大なスケールと石垣の巨大さに太閤秀吉の富と権力を見せつけられました。初めての東京の自由行動では林立するビルと雑踏の中で道に迷わず目的地に移動するのが大変でした。交通手段として地下鉄銀座線？で渋谷～銀座～浅草を何度も往復し浅草仲見世でお土産に雷おこしを買って浅草寺に旅の安全をお願いしました。

旅先で出会った多くの人々から、何処から来たのですかと度々尋ねられ、北海道釧路からと答えると、〝挽歌の街釧路からですか〟と。小説〝挽歌〟は昭和32年女流文学賞を受賞後70万部を越える大ベストセラーとなり、久我美子主演の映画化決定で空前の挽歌ブームが起こりました。道東の一都市釧路が全国区に知名度を上げて認知された功績は小説挽歌と言っても過言ではないでしょう。

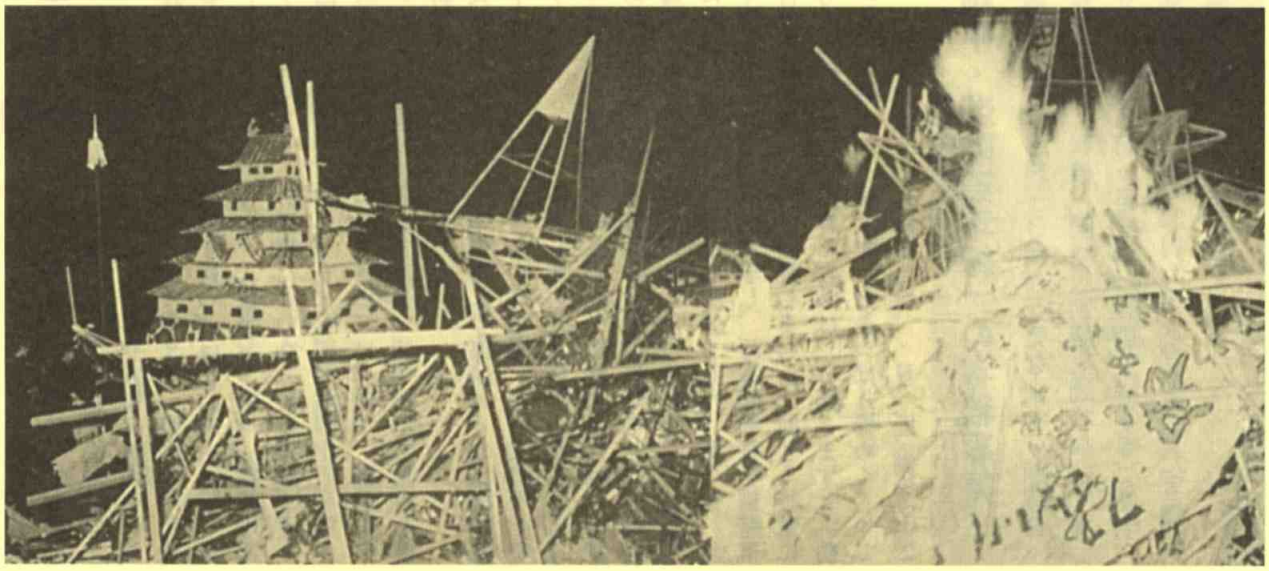
釧路の街はトッパーコート、黒スラックス姿の謎めいたヒロイン兵藤怜子が霧の中から現れるようなロマンチックな街、一度おいで下さいと得意げに話したことを思い出す。

それからまもなく末広町に喫茶〝ダフネ〟が開店、エデン、クロンボ、モカetc学校帰りに喫茶店でクラス仲間や部活仲間とちょっぴり大人の気分を味わったのも忘れられない。

湖陵祭～行灯行列

昭和31年スタートした湖陵祭行灯行列は年々盛大になり、全学年24クラスがアイデアを凝らし競って製作に励みました。我が3日クラスは喧喧諤諤議論の末、五層からなる壮大な3日城を一週間深夜まで47名全員の汗と創意工夫と強い団結力で作り上げました。クラス一同完成した作品を見ながら良くも堅固で立派な城が出来たもんだと自画自賛！日が落ちる頃からローソク明かりで浮かび上がる3日城を担ぎ、北大通・幣舞橋をワショイワショイと練り歩き、多くの市民が暖かい声援と拍手を送ってくれました。

行灯行列のフィナーレはグランドでのファイヤーストーム、グランドの中心では到着順に行灯を焚き火に投げ込み夜空を赤い炎が高く舞い上がる。最後に到着した我々の3日城を全校生徒が見守る中、燃え上がる炎の明かりと熱気を感じながら周囲をまわり高々と持ち上げ投げ込みました。赤々と燃え上がるファイヤーストームを囲んで汗まみれで肩を組み大声



卒業アルバムより

昨年の同窓会より

で校歌・応援歌を歌い、湖陵生の誠愛勇の心意気と強い絆を身体全体で感じた熱い一日でした。3日城は行灯行列コンクール第1位の栄誉に輝きクラス全員で喜びを爆発させたのは言うまでもない。

平成19年7月13日、49年ぶりに行灯行列を見学、当時を思い出しながらビデオ撮影、映像の一部分が地元NHKたんちょうテレビで放映されました。兎狩やマラソン大会が中止される中、行灯行列が湖陵の伝統行事として脈々として後輩に受け継がれていることに懐かしさ喜び伝統の力強さを感じました。

11期生同期会

出会いから50余年の長い年月は、我々が巣立った母校の移転に伴ない湖陵が丘の景観を大きく変えました。出会い（入学）別れ（卒業）再会（同期会）の繰り返しの中で、かつての血気盛んな少年、見目麗しき少女はそれぞれの年輪を感じさせるようになりました。我が11期生はこれまでに釧路・札幌交互に4回の同期会を開催し、懐かしい友との再会、尽きない思い出を語りながら時を忘れ朝まで飲み歌い踊り、あの多感な青春の日々に思いを巡らしてきました。平成21年、卒業50年の節目の年には全国の11期の仲間に呼びかけ思い出多き釧路の地で大規模に同期会を開催したいと考えています。

全国から多くの仲間が集い楽しい同期会になるよう期待してます。

老齢となった今、時は若き日の10倍の早さで過ぎていく。1日を10日として、ひと月を1年として楽しみ、心を静かに従容として腹を立てず欲を少なく身体を養うべきと養生訓は教えています。人生80年、素晴らしい11期生仲間の絆を大切に心身健康で何時までもあの青春の心を持ち続けて過ごしたいものです。

平成15年10月26日阿寒湖温泉にて

平成19年度同窓会・懇親会だより

先輩、後輩も校歌を歌えば、心が一つに

釧中・釧路湖陵同窓会が昨年8月11日に、釧路キャッスルホテルで開かれ、約500人の同窓生が参加しました。校歌斉唱、物故者へ黙祷が捧げられたあと、栗林延次会長が、「これだけ多くの同窓生が参加した勢いで5年後の100周年を迎えたい」とあいさつをしました。このあと議事に入り、事務局より平成24年に迎える開校100周年の事業内容について検討を始めたい、との報告とともに、同窓生に協力を求めました。また、役員改選の年ですが、栗林会長をはじめ、全員留任することが満場一致で決まりました。

今回の幹事は、湖陵25、35、45期です。懇親会では、現役生のチアリーダー、合唱部、吹奏楽部が、それぞれステージで元気いっぱいに演奏などを披露し、先輩たちから盛んな拍手を浴びていました。

今年は26、36、46期が当番期です。いよいよ100周年まで5年を切りました。これからの同窓会は、記念事業に向けての序奏となります。多くの同窓生みなさまのご意見を事務局までお寄せいただきたいと思いますし、総会への参加をお願いします。

星　匠（湖陵30期）

「この勢いで100周年迎えたい」とあいさつする栗林会長

毎年の同窓会に花を添えるチアリーダー

校歌をはじめ、美しいハーモニーを奏でる合唱部

息のあった演奏を披露する吹奏楽部

総会幹事うら話

釧路市民センターわっと職員
成ケ澤　成（24期、54才）

湖陵高校を卒業して、もう35年が経ちました。同窓会の幹事当番も一昨年で卒業し昨年の夏はテーブルに座りのんびりゆっくり、諸先輩や後輩と杯を酌み交わすことが出来ました。家に帰り同窓会式次第を見たら自分達が始めて幹事をした30代の時を思い出しました。

それは、4月始め市役所の友人から同窓会の幹事期だからクラスの代表として、某料亭に何時に来てくれないかの電話で始まりました。そこに出席すると4期の先輩と14期の先輩多数が座っていました。今まであまり同窓会に参加したことがなかったので戸惑っていると、各自の自己紹介をし宴会が始まりました。先輩がビールを我々に注ぎに来てくれます。『どこに勤めているのか?』『そこに誰々がいるだろう』とか話を聞いているうちに、釧路における湖陵の人脈地図が出来上がってきます。宴も終わりに近づいてほろ酔い気分でいると、14期の先輩から24期は会券販売100枚、広告50件以上取るよう指令がありました。14期の先輩は会券300枚、広告150件、4期の先輩はできるだけご協力下さいとのことでした。料理もお酒も美味しかったけれど大変な場所に参加してしまい後悔しました。でも先輩達の各期の力を結集して是非成功させたいとの意気込みに飲まれ、私も出来る限りのことをしなければならないと思いました。そのとき出席して思ったのは14期の先輩が主役で、24期は見習い、4期の先輩はお目付け役の役割分担になっていました。

第1回の打ち合わせが終わり数日後の4月某日同期で某喫茶店により24期に与えられたノルマの達成に向けての話し合いを持ちました。某歯科医を同期の長に据え、各クラスで金券10枚、広告も各10件前後を取ることにしようと決めました。先輩と同じぐらい100件を目標に動く事になりました。まずは同期で商売している店を各クラスで声をかけることにしました。また勤務している会社にも一応当たってみることになりました。会券は初幹事ということで何とか消化する事が出来ましたが、でも大きな会社や官庁などは会券が上司というか先輩から買う事になっている等、人脈地図が張り巡らされていました。

さらに総会資料の広告に関しては前年広告を出してくれた会社に関しては、先輩方がすでに確定していて同期では取れませんでした。それでも同期の商店や会社は、今年限定とのことでしぶしぶ承諾してもらえました。会社関係ではやはり30代の我々より、先輩達の人脈地図の中にはまってしまい、『もう出しましたよ』とか『○○先輩からもう話が来ている』等、広くて狭い釧路の中では苦戦の連続でした。でも○○君が仕事をセーブしたり、取引先にお願いしたりして懸命に動いていることで、同期のみんなもがんばり101件もの広告をとることが出来ました。7月、同窓会前の最終チェックの会議でも、先輩諸氏から良く取ったねとお褒めの言葉を頂きました。始めての幹事見習期が一生懸命頑張ると、新陳代謝が起こり同窓会の輪が広がってゆくことになることを確信しました。この時のがんばりで同期仲間のつながりもでき、同期会を結成し同窓会が終ったあと盛大に盛り上りましたし、毎年集まるようになりました。

これから幹事期を迎える後輩の皆さん、最初の見習い幹事期（32才）に同期の仲間をどのくらい動員できるか、先輩諸氏からのノルマをいかに達成するかが、本番の10年後が楽しく迎えられるか、苦労するかの分かれ道になるように思います。我々24期はこの見習期後に、各クラスで名簿を整理し、年一回は集まり同期会をするようになりました。最初は20名～30名でしたが、10年後の本番（42才）では80名になり、一昨年の総会幹事期では100名以上が参加する同期会になっています。このようにまとまれたのは、同期の名簿作りや連絡など、骨身を削って活躍してくれた○○君がいます。本当に同期のみんなを引っ張ってくれた○○君に24期を代表して、『ありがとう』の言葉を贈りたいです。24期はこれからも、のんびり、ゆっくり、楽しく交流を続けて同窓会にも参加していきたいと思います。

釧路教職員湖陵会だより

釧路教職員湖陵会（戸松栄会長）は、自らの教育技術を磨くことと互いの親睦、母校への支援を目的に昭和30年に結成。爾来、半世紀を越えての活動の中で異業種の湖陵同窓生を講師として迎えての研修会は、とかく教職の殻に閉じこもりがちな会員にとって意義のあるものである。今年度の研修会は、昨年11月10日（土）に戸松会長と同期（湖陵21期、昭和44年卒）東家愛国店店長である平行雄氏を講師に迎えて、同店にて開催。

東家総本店『竹老園』の名の由来から話が切り出され、釧路市内や帯広・札幌の東家各店への暖簾分けの経緯などを系図に基づいて語ってくださった。

また、そば粉の違い（更級粉・全粒粉）や二八そばなど普段なかなか聞くことのできない蕎麦にまつわる話に会員たちも耳をそばだてて聞き入り、興味津々の様であった。

最後には、2種類の粉で練ったそばの試食に舌つづみをうってお代わりをする者がでるほどの好評さで講演会の幕を閉じた。

川端紀一（湖陵11期）

事務局だより

カウントダウングッズ

2012年、開校100周年を迎えます。そこで同窓会としても、記念行事のPR、盛り上げのためにも学校や後援会と協力して、さまざまなイベントを考えています。その第1弾として、「カウントダウン」グッズを販売する予定です。

まず作ったのは、Tシャツです。背中に開校100年まであと○年というTシャツを、同窓会入会式で卒業生全員にプレゼントします。

卒業生にプレゼントするTシャツ

ジャンパーも用意します

サイズは各生徒にちゃんと合わせます。

また、在校生や同窓生向けにも、トレーナー、ジャンパーなどを販売する予定です。まず手始めに、Tシャツを学校の売店で、その後、準備ができ次第、トレーナーなども店頭に並ぶ予定ですし、釧路はもちろんですが、東京、札幌、十勝各支部の同窓会総会でも販売できるようにしたいと考えています。

なお、販売した益金は、湖陵高校のいろいろな活動費にあてますので、同窓生のみなさまのご協力をお願いします。

星　匠（湖陵30期）

ふるさとに歴史発見

釧路地方が誇る観光資源は自然関係や食文化が圧倒的で歴史関係が弱かった。しかし昨秋朝報が2件あった。幕末から戦前までの「近代化産業遺産」として経済産業省から阿寒町の「雄別炭鉱関連遺産」が11月末に認定された。「産業遺産はその地域に住む人にとってアイデンティティ（自己基盤）である。」と言うことで自分が生まれ育ち就職した雄別を忘れられない釧中・湖陵生もいることでしょう。雄別はこれから観光ツアーの立ち寄り先として地域住民が熱意を示して行けそうです。もう一つ昨年の大河ドラマ「風林火山」の主人公は幻の軍師山本勘助でした。その実在を証明する古文書「市河文書」が釧路市指定文化財ということで市河文書展が全国4ヵ所の一つとして釧路市で12月開催、記念講演にも市民が大勢駆けつけた。山形県酒田市の本間美術館所蔵「市河文書」は国指定重要文化財で、これに劣らぬのが釧路市「市河文書」です。釧路市在住の市川氏は、上杉家家臣として山形県米沢から明治23年に厚岸郡太田村へ移住した屯田兵のご子孫です。

田巻恒利（湖陵18期）

編集後記

昨年は、不二家、苫小牧ミートホープ社や船場吉兆、石屋製菓の『白い恋人』、マクドナルド社、伊勢赤福、崎陽軒のシュウマイなど表示偽装や期限切れ再使用が相次ぎ食品に対する信頼が揺らいだ。食品表示やブランドを信用する客は裏切られた思い。▼客のブランド信仰を逆手に鵡川シシャモの例はひどい。昔、鵡川シシャモが不漁で何年も禁漁以来、大生産地釧路・十勝沖産のシシャモが鵡川に運ばれ鵡川シシャモに化けた。鵡川高校が野球で甲子園に出場の時「シシャモ打線」と宣伝した。それと知らずに大勢の客がシシャモは鵡川に限ると『鵡川シシャモ』ブランド認定後も注文する。鵡川であろうと釧路であろうとシシャモに変わりはないとする鵡川のブランドに対するおごりはないだろうか。昨秋、鵡川からの荷引きを受け釧路沖シシャモが高騰し地元釧路の水産加工会社は赤字販売になるため困惑した。ブランド（銘柄品）はブラインド（目隠し）に通じる。客は宣伝やブランドを盲信せず己の五感と判断力を磨くしかない。▼25年前、京都で江戸時代からの暖簾を誇る老舗菓子店に立ち寄った。雑誌に載るほど有名店だが建物も古く小さな店は、その日に作った分が売り切れれば「売り切れ御免」を頑なに守る。夕方を待たず閉店する日もあるので予定を早め昼過ぎに着いた。その老舗は支店を置かず大量生産を避け品質と信用を守り続けた。「屏風と食い物屋は間口を広げると倒れる」この格言が飽食時代の今に生き伸びていて、その老舗に爽やかな感動を覚えた。

田巻恒利（湖陵18期）

釧路湖陵高校
〒085－0814
釧路市緑ケ岡3丁目1番
TEL（0154）43－3131
ホームページ
http://kushiro-koryo.hp.infoseek.co.jp/

くまざさ編集委員会

同窓会会長　栗林延次（湖陵17期）
同窓会幹事長　島本幸一（湖陵19期）
同窓会会計長　佐藤文昭（湖陵22期）
編集委員長　星　匠（湖陵30期）
編集委員　川端紀一（湖陵11期）
編集委員　増子正樹（湖陵20期）
編集委員　渋谷倫之（湖陵26期）
編集事務局長　田巻恒利（湖陵18期）

くまざさ編集委員会
〒085－0014
釧路市末広町2丁目4番地
栄屋旅館内
TEL0154（23）0241
手動切替FAX
0154（23）0242